

大澤 壽人 Hisato Osawa

交声曲『海の夜明け』(相馬 御風 詞) Cantata "Dawn of the Sea" (Lyrics by Gyofu Soma)

## ～大澤壽人作曲《海の夜明け》 歴史的な名作78年ぶりの復活演奏～

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)は、今日、再注目の作曲家・指揮者である。戦前に欧米で認められ、凱旋帰国するも戦争に阻まれ、また日本楽壇に理解されないまま、47歳で急逝。半世紀以上忘れられた後、代表作CDがリリースされ、その斬新な音楽に「平成の復活劇」が起こった。最近ようやく全貌を現した天才である。

大澤は神戸生まれ。関西学院卒業の1930年に留学し、ボストン大学とニューイングランド音楽院で日本人初の作曲専攻生となった。ボストン交響楽団定演で聴いた現代音楽や巨匠A.シェーンベルクに触発され、前衛派の新進作曲家に急成長した。

1933年には日本人初のボストン響指揮。以降も「日本初」は数多く、指揮者S.クーセヴィツキに認められ、戦前の日本で最大級の《交響曲第一番》等を数ヶ月で完成。圧倒的な創作力をみせた。

その後フランスに渡り、エコールノルマル音楽院でP.デュカに師事、N.ブーランジェのレッスンを受けた。1935年にはコンセルヴァトワール管弦楽団を率いた作品発表会でパリ・デビュー。大作曲家J.イベールやA.オネゲル等に絶賛され、一夜にしてヨーロッパ楽壇に知れ渡る等、29歳にして日本音楽史上の快挙を遂げた。

しかし時代は暗く、1936年の帰国以降、日本は太平洋戦争への道を歩む。楽壇は大澤の輝かしいキャリアも先鋭の作風も、評価できなかつた。だが、新たなジャンルへ乗り出し、ラジオや映画音楽等の世界で第一人者として活躍した。

一方で、神戸女学院の教壇に立ち、戦後は「音楽による人々の心の復興」を掲げ、朝日放送の音楽総監督的立場で関西楽壇を牽引。作曲家・編曲家・指揮者として無二の存在であったが、過労で倒れ帰らぬ人となった。遺した作品総数は作曲・編曲を合わせ、千に近い。

《海の夜明け》は、ソプラノ・テノール・バス独唱と混声合唱と二管編成管弦楽のための作品で、大澤の大規模声楽曲の代表作。作曲された1940年は、神武天皇即位を元年とする「紀元二千六百年」にあたり、国は祝賀ムードに沸いた。本作品も、信時潔の《海道東征》等と共に奉頌作品の一つで、大澤自身が指揮して2月に放送初演、5月に演奏会初演が盛大に行われた。

作品は、相馬御風(そうま・ぎよふう、1883-1950)の長詩に基づき、燦然たる言葉が連なる。4部に分かれ、前3楽章は記紀(古事記と日本書紀)からの古代伝説を語り、終楽章で今世の日本を称える。

【第1部 神の御霊】威厳に満ちた「大日本は神の国なり」で始まり、終わる楽章。三種の神器(剣、勾玉、鏡)の鏡について、ソプラノ独唱(天照大御神)が歌う。

【第2部 輝く神鏡】日本武尊の西征と東征の物語。波間の描写に続き、バス独唱が歌い始め「御船は進む…大海原を肅々と」と結ぶ。これに合唱が従い、ソプラノ独唱が西征、テノール独唱が東征を語る。再び夜の航海となり、蝦夷の国に近づいた頃、舳先の鏡が朝日に光り輝く。「あゝ、燦爛たり煌々たり」とその讃歌に移り、自然と生き物が「溶け合いて輝きわたる尊さよ」と歌い上げる。

【第3部 神の御子】夜明けの霞む海から現れた日本武尊と蝦夷との対和。弦のピッツィカートによる行進曲風リズムが、鏡が煌めく中に雄々しい姿を見せる日本武尊を表わす。「いかなる人にてましますか」と蝦夷たちが問うと、「吾れは、これ、神の御子なり」と応え、その御言を「讀えまつらむ光なれ」と合唱が尊ぶ。

【第4部 明け行く島】日本を称揚する終楽章。《君が代》の一部を主題とし、4つの変奏が続く。終曲部はテンポが上がり、音量も華々しく祝典楽が終了する。

《海の夜明け》は、劇的な表現と交響大作を得意とした大澤の、面目躍如たる交声曲である。初演から実に78年を経たこの復活演奏に際しては、秋山和慶氏の下に、大阪教育大学が総力を挙げた。